

キュレーター・ステートメント

メアリー・ウェザーフォードのキャンバス作品は、身振りに満ちた極めて身体的な制作プロセスから生み出される。そこでは、作家の直観と長年の経験が、スピードや即興性、さらには偶然性と拮抗しながら作用している。その結果として結実した画面の完成度は、多くの試行錯誤を経て獲得されたものであり、そのこと自体が一種の奇跡のように感じられる。

より小さなスケールで制作された紙の作品においても、ウェザーフォードは同等のエネルギーと緊張感をもって制作している。流動性が高く速乾性をもつ素材を自在に操る卓越した技術によって、紙面には生き生きとした表現が展開される。その魅力は、2024年に雁皮紙にシェラック・インクを用いて制作された連作に顕著に表れており、本展では、2024年の紙作品の一群に加え、鮮烈なネオン管を用いた近作一点もあわせて展覧します。

紙の作品は、濃密さと開放性を同時に併せ持ち、豊かな暗示性と視覚的效果に満ちている。それらは一見すると陸地や水辺の風景を想起させるが、じっくりと向き合うことで、より多層的で深遠な世界が立ち現れる。キャンバス作品もまた同様に、風景や天空の情景として読まれる一方で、動植物の生命体、夢のイメージ、さらには幻想的なヴィジョンへと解釈を開いていく。その意味の広がりほとんど無限である。

ウェザーフォードは2012年、初めて完成した絵画の上にネオン管を設置した。それ以来、ネオンは彼女の作品を特徴づける重要な要素となっている。重要なのは、彼女がネオンを加えるかどうかを決めるのは、あくまで彼女が書き終え、感性とみなした後という点だ。ネオンは絵画の一部として描かれるのではなく、完成された作品に対する補完でもあり対比である存在として加えられる。その結果、作品は「イメージ」から「オブジェ」へと転じ、ネオンの光は画面に重ねられた複雑な絵具の層を物理的な意味でも、また象徴的な意味でも照らし出すのである。

ジェレミー・ストリック